

天国に行けると 確信していますか？



COLIN S. SMITH



How Can I Be Sure About Heaven

By Colin S. Smith ©*Open the Bible*, 2019 All rights reserved.

Unless otherwise indicated, all Scripture quotations are from The Holy Bible, English Standard Version (ESV), copyright ©2001 by Crossway, a publishing ministry of Good News Publishers. Used by permission. All rights reserved.

All rights reserved. No part of this publication may be reproduced in any form or by any means without prior permission from *Open the Bible*.

Design and typeset by High Note Design.

天国に行けると確信していますか？

どうしたら天国に行けるという確信を持てるのか？これ以上に重要な問いは想像し難いです。世界中の全ての人に関わる問題です。私たちは皆それぞれ違いますが、一つだけ共通点があります——遅かれ早かれ、誰もが死ぬということです。それは今週かもしれませんし、今月かもしれません。今年かもしれませんし、ずっと先かもしれません。しかし、これほど確かなことはありません...その日は必ず訪れます。いつの日か、目を覚ましたら、自覚していようといまいと、それがこの地上で過ごす最後の日となります。その時、あなたはどのようなのでしょうか？

十字架にかけられた強盗の物語は、天国を確信する方法を教えています。その物語はルカによる福音書の23章に記されています。

ほかにも二人の犯罪人が、イエスとともに死刑にされるために引かれて行った。「どくろ」と呼ばれている場所に来ると、そこで彼らはイエスを十字架につけた。また犯罪人たちは、一人は右に、もう一人は左に十字架につけた。

ルカ 23:32-33

そこで、その強盗の一人が言います、「イエス様。あなたが御国に入られるときには、私を思い出してください。」すると、イエスは彼に言われました、「まことに、あなたに言います。あなたは今日、わたしとともにパラダイスにいます」(23:42-43)。

私たちが天国へ行くには善い人生を送らなければいけないと考えるのは自然なことですが、この強盗はそのような人生を送っていませんでした。彼は犯罪者でした。マルコの福音書では「強盗」と記され、その罪の重大さゆえに死刑を宣告されました。

どのような事情で死刑判決を受けたにせよ、彼は明らかに善い人生を送っておらず、そのことを自覚していました。彼は判決の正当性を争わず、むしろこう言いました、「おれたちは、自分のしたことの報いを受けているのだから当たり前だ」(23:41)。

彼は善い人生を送ってきませんでしたし、もう時間が残されていません！もう心機一転して生きる立場にありません。手足を十字架に釘付けにされた状態で、善行を始めることなど到底できません。それなのにイエスは彼に言います：「あなたは今日、わたしとともにパラダイスにいます！」

これは驚くべきことです！「天国に入れるかどうかは、自分の生き方次第だ。入るためには、神を喜ばせるほど十分に善い人生を送らねばならない」という広く浸透している考えと完全に矛盾しています。この強盗は明らかにそんな人生を送っていません。では、彼はどのようにして天国に入れたのでしょうか？それが問題です。

そして良い知らせは、もし彼が天国に入れるなら、あなたも入れるということです。この強盗の物語は、その方法を示しており、それは三つの言葉で要約できます——悔い改め、求め、信じる。

1. 悔い改め

強盗は少なくとも六時間、十字架にかけられていました。その間、彼のイエスに対する態度に驚くべき変化が生じました。

マタイは、二人の犯罪者が十字架にかけられたと記しています——イエスの左右に一人ずつ。「イエスと一緒に十字架につけられた強盗たちも、同じようにイエスをのしった」(マタイ 27:44)。

ここには二人の犯罪者がいました。最初は二人ともイエスを罵倒していました。しかし、一人が罵り続ける中、もう一人に変化が訪れました。聖書はこの変化を悔い改めと呼びます。

悔い改めとは、自分自身について知っている限りをもって、自分の罪について知っている限りから、神について知っている限りへと向き変えることです [1]。

[1] J.I. パッカー著『Keep in Step With the Spirit (聖霊と共に歩む)』(ペイカー社刊、2005年) 87ページより改編

ですから、悔い改めは時と共に深まります。神がどのようなお方かを知れば知るほど、自分がどのような者かを理解すればするほど、罪が何かを把握すればするほど、悔い改めは深まるのです。しかし全ての過程には始まりがあり、この強盗の物語は悔い改めの出発点を示しています。

神を恐れ始める

強盗はイエスに罵声を浴びせていましたが、やがて自分の行く末について考え始めると、魂に静けさが訪れました。なぜ私は神に逆らうのか？ 間もなく神の御前に立ち、自分の人生を弁明しなければならないのに、何の意味があるだろう？

彼は、イエスへの罵声を続けているもう一人の強盗のほうを向き、言いました、「おまえは神を恐れないのか。おまえも同じ刑罰を受けているではないか」（ルカ 23:40）。

十字架の強盗は神について多少の知識は持っていましたが、自分の人生において神を重んじていませんでした。もし重んじていたなら、強盗になることはなかったでしょう。代わりに彼は、神が自分の人生に求めるものを拒否しました。自分の道を進みました。そして神から遠ざかるほど、良心の呵責は薄れていきました。

しかし今や彼は永遠の淵に立っており、神の御前に立つ恐怖が彼を襲いました。神を恐れることは神に立ち返る始まりであり、それはイエス・キリストをあなたの王として認めることへつながります。

キリストを王として認める

イエスに向き直って、強盗は言いました、「あなたが御国に入られるときには、私を思い出してください」（ルカ 23:42）。

盗賊はイエスが王であることを認めました。もし彼が王であり、死に向かっているのなら、あの世に着いた時、私を助けるために何かをしてくれるかもしれない。

イエスは、御自身が王であると認める者に対して言われます、「あなたは...わたしとともにパラダイスにいます」（ルカ 23:43）。

天国に入れることを確信するにはどうすればよいのか？ 立ち返るのです！ 神を恐れ、イエス・キリストをあなたの王として従うのです。

2. 求める

強盗は求めました、「イエス様、あなたが御国に入られるときには、私を思い出してください」（ルカ 23:42）。それは大胆な願いでした。ほんの少し前まで、彼はもう一人の強盗と一緒にイエスに呪いの言葉を浴びせていました。もしイエスが御国に入られる時にこのことを思い出されたなら、強盗に救いはありません。それでも強盗は求めました。

求めるとは自分が正しいと装わないことです

強盗は「確かに過ちは犯したが、完璧な人間などいない。人生で多くの善行も積んできた」とは言いませんでした。代わりにこう言ったのです、「おれたちは、自分のしたことの報いを受けているのだから当たり前だ」（ルカ 23:41）。

彼はキリストに誠実かつ謙虚に願い求めました。自分が罪人であるという事実に向き合いました。彼は神に対して、また隣人に対して罪を犯したのです。そして私たちも彼と同じです。神が私たちに命じられたことを果たせず、神が禁じられたことを行ってしまったのです。

全能の神の前で、私たちは罪人です。まさにそのためにイエスは十字架にかけられ、罪人のためのいけにえ、身代わりとなられたのです。「主は私たちすべての咎を彼に負わせた」（イザヤ 53:6）。イエスは自らの死の中で多くの罪を背負われました。それはあなたが自らの死に罪を抱え込まなくて済むためです。

求めるとは取り引きしようとしなないということです

私たちは頼み事をすることを好みません。代わりに取引を好みます。そして自分から提供できるものを示すことから交渉を始めようとします：「私があるあなたにできることはこれです。さあ、あなたにやってほしいことがあります。」

しかし、強盗はイエスに提供できるものが何一つありませんでした。何も持っていませんでした。できることはただ、乞食のようにイエスに向き、求めることだけでした。そして彼はそうしました。

これは重要な点です。なぜなら、神に対して私たちが最初に抱く本能は、取引という観点で考えることだからです。祈れば... 教会に行けば... 寛大であれば... 善い人生を送れば... そうすれば神は私を天国に入れてくださる。

しかし、そのような姿勢で神の御前に来るとこうなります：まず、生涯を通して神が自分に借りがあると思込み、次に、神は取引をされない方なので、存在しない取引に未来を託すことになります。

求めるとは、イエスの前に何も献げられない空っぽの手で臨むことです。できるのはただ求めることだけ。その求めの中で、あなたは神の憐れみに身を委ね、恵みを仰ぐのです。

強盗の行動は、一見単純に見えました。彼は神を恐れ始め、自らの罪深い状態を認め、王であるイエスを信じ、残りのことは神の御手に委ねて救いを求めたのです。

3. 信じる

深刻な心臓病を患い、開胸手術が必要だと想像してください。外科医のもとを訪れると、彼は言います、「まず麻酔で眠らせ、メスで胸を切り開きます。」

医師はさらに、これから行う処置を詳細に、しかも生々しく説明し、その後書類をあなたに手渡して言います、「こちらが署名用の書類です。ご承諾いただければ、手術の日程を調整します。」

人がこの書類に署名するのは、外科医が自分ではできないことをしてくれると知っているからです。もし手術を受けなければ、他に望みがありません。こうして彼らは自らを外科医の手に委ねるのです：「やってください。あなたを信頼します。」

同じように、強盗も自らをイエスの手に委ねました。そして信頼する者に対して、イエスはこう言われます、「あなたはわたしとともにパラダイスにいます」。これは、イエスを信頼するすべての人への救い主の約束です。

もしあなたがイエスに立ち返り、救いを求めるなら、何を得るでしょうか？ 得られるのはイエスの言葉です。イエスの約束です。イエスは言われました、「わたしのもとに来る者を、わたしは決して外に追い出したりはしません」（ヨハネ 6:37）。なので、イエスの御前に来て、求め、その言葉を信じましょう。

闇の中で信じる

強盗がイエスを信じた直後、「全地が暗くなり」ました（ルカ 23:44）。この闇は真昼に始まり、三時間続きました。

強盗の立場に身を置いて考えてみてください。あなたはまさに自分の命と天国への望みをイエスに委ねただけです。すると突然闇に包まれ、イエスが叫ぶ声が聞こえます、「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか？」（マタイ 27:46）。

強盗はきっと思ったに違いありません、一体何が起きているんだ？

もしあなたがイエス・キリストに信頼を置いたなら、人生において深い闇を体験する時が来るかもしれません。そんな時が来ても驚かないでください。光の中と同じように、闇の中でもイエスの約束を確信して頼ることができます。

苦痛の中で信じる

イエスを信じることで苦痛のない人生が得られると主張する者は、聖書が真に語っていることを正しく受け止めていません。イエスを信じた後の強盗の苦痛を考えてください。十字架刑の苦痛は刻一刻と増し、手足の傷口が広がり、熱が全身を襲いました。つまり強盗はイエスを信じた後、信じる前よりも大きな肉体的苦痛を味わったのです！

あなたは闇の中でイエスを信じなければならない時があり、苦痛の中でイエスを信じなければならない時もあるでしょう。

死の中で信じる

あなたに死の瞬間が訪れた時、強盗のようにイエスを信じなければいけません。

数年前、ある年老いた牧師が重病で余命幾ばくもない状態にありました。同僚の牧師が面会に訪れ、ストレートに言いました、「死に方を教えに来た。クリスチャンとしての歩みは忘れろ。」

「クリスチャンとしての歩みを忘れる？ 本当か？」

「ああ、本当だ。理由はこうだ。もしあなたが横たわりながら、自分がイエスのために成し遂げたことを考え始めたなら、すぐにイエスのために成し遂げられなかったこと、イエスのためにできたかもしれないこと、イエスのためにもっと良くできたはずのことが見えてくる。そうなれば、すぐに疑いと恐れに包まれるだろう。」

「では、どうすればいい？」

「イエスのために自分がしたことは忘れ、イエスが自分のために成し遂げてくださったことにのみ目を向けるのだ。」

死に方こそが生き方を示します。イエスのために成し遂げたこと、成し遂げられなかったことを忘れ、十字架でイエスが自分のために成し遂げてくださったことに完全に信頼するのです。

今、強盗は天国にいます。その理由は、彼に罪がなかったからでも、十分に良い人生を送ったからでもありません。イエスが彼の罪の代価を支払い、新しく永遠の命を与えられたからです。イエスが強盗のために成し遂げたことを、イエスはあなたのためにも成し遂げられるのです。

二人の違い

しかし覚えておいてください、強盗は二人いました。一人は救われましたが、もう一人は滅びました。二人とも同じ必要を抱え、同じ機会を与えられました。二人ともイエスのすぐ隣にいました。二人ともイエスが祈る声を聞きました。「父よ、彼らをお赦してください。彼らは、自分が何をしているのかが分かっていないのです。」

しかし決定的な違いがありました：一人は悔い改めと信仰をもってイエスに立ち返りましたが、もう一人は距離を置いたままでした。

あなたは次のように考えているでしょうか：今は決断したくない。時間をかけて考えたい。

もしその選択をするなら、次のうちいずれかが起こります：悔い改めてから、もっと早く悔い改めればよかったと後悔するか、あるいは心がイエスに対して硬くなり、決して彼のもとに来なくなるかです。なので今、信仰と悔い改めをもってイエスのもとに来ましょう。

あるいは、今更イエスに立ち返るのは遅すぎると恐れているでしょうか。十字架の強盗を思い出してください。彼にとって遅すぎることはなく、あなたにとっても遅すぎることはありません。イエスに立ち返り、イエスに求め、イエスを信じる時は今です。早いほど良いですが、今からでも遅くありません。

次の祈りをお使いください：

主よ、私は罪人であり、あなたの天国に入るに値しないことを告白します。しかし、あなたが王であり、私のために十字架で死なれたことを信じます。どうか私を覚えて、あなたの御国へお迎えください。あなたのもとに来る者は決して追いつ出されないというあなたの約束を信じます。

FOR MORE RESOURCES TO LEARN ABOUT HEAVEN VISIT
YOUR URL HERE